

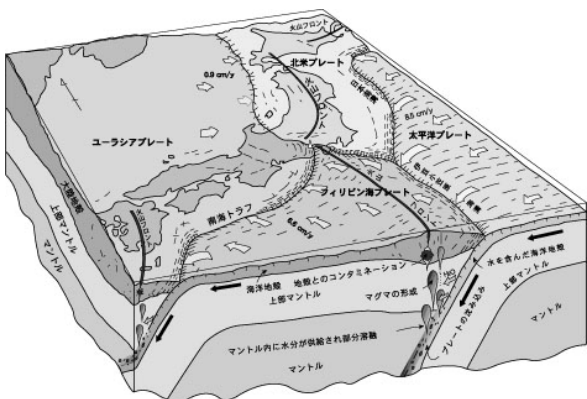
日本列島は、地震の巣

日本列島の面積は、世界の400分の1だが、全世界で起きる地震の10%が日本列島で発生している。活火山は、7%が集中している。

地震や活火山の多い地域は、いずれもプレートとプレートとの境界にある。日本列島は、海洋プレートが大陸プレートに「沈み込む」境界にある。それも太平洋プレートが北米プレートの下に、フィリピン海プレートがユーラシアプレートの下にと4つのプレートがせめぎ合う世界でも稀な地域の一つだ。

「なまず」の正体は、「プレート沈み込み」

地球科学者は、日本列島の地下に潜む「なまず」の正体は「プレートの沈み込み」であることを解明した。



プレート型の巨大地震は、プレートが沈み込む際の「ひずみ」によって引き起こされる。また火山活動は、沈み込んだ海洋プレートの水分がマントルを溶かし、マグマが発生、これが地上に上昇してくることから引き起こされる。

「日本海」ができて日本列島が・・・

「日本列島」自体が、この「プレートの沈み込み」によって造られてきた。約1億5000万年前、イザナミプレートの沈み込みによりその堆積物が変形・破壊され、はぎ取られながら大陸の縁に付加されていった。これが日本列島の主要な部分となった。次に太平洋プレートが沈

み込みを始めた。約2500万年前、大陸縁辺の土台と大陸の間に陥没地形が形成された。この陥没地形は、約1900万年前から約400万年かけて拡大し日本海となった。この拡大は、年間平均30cmのスピードだったようだ。日本海の拡大により東北日本は、反時計回りに25度、西南日本は時計回りに約45度回転しながら太平洋側に押し出された。そこに伊豆火山弧が衝突して、東北日本と西南日本が合体。「逆くの字形」の現在の日本列島の原型ができた。

これが日本列島の誕生記だが、主要な部分は、堆積物が圧縮・変形、はぎ取られた付加体であり、列島の地質が複雑であり、少し移動するだけで億年、万年の旅をすることができるゆえんだ。ゆえに、日本の地殻はズタズタ、至る所に断層が潜んでいるのだ。列島においては、いつでもどこでも直下型の地震が発生してもおかしくない。

余談 1. 「日本海」を「東海」と呼べという隣国がある。しかし、日本海が生まれて日本列島が誕生したのである。その論で言えば「日本列島」は「東列島」になってしまう。

余談 2. リニア中央の南アルプストンネル工事は不幸をもたらす。フィリピン海プレートの沈み込みにより、南アルプスは年間cmの隆起を続けている。地層も複雑であり重金属等の流出も心配である。

億年、万年の時空を越えて 「科学の眼」

以上、地球科学者は億年、万年の「時間軸」と数千kmの「空間軸」で発生している自然現象をさも見てきたかのように説明する。どのような「科学の眼」を持っているのだろう。

岩石、地層の観察、対話が大前提だ。当初は化石によってその年代を大まかに推測していた。現在は放射年代測定で正確に把握できるように

なった。古地磁気の測定によりプレートの移動が確認。現在では、GPS、人工衛星を使った観測によりmm単位の水平移動の空間把握が可能になった。地下空間については地震波の観測による。

地球科学者の創造的な洞察力と測定機器の飛躍的発達で科学の眼が研ぎ澄ましてきたのだ。

.....

【地学ノススメ 「日本列島のいま」を知るために】 著 鎌田浩毅 2017年 講談社

「1000年ぶりの大地変動の時代が始まってしまった」と警鐘を鳴らしている地球科学者。専門は火山学。

本書では、人類が3千年かけて築きあげてきた地学の世界を紹介。日本列島の地学「西日本大震災は必ず来る」。巨大噴火のリスクを分かりやすく紹介してくれている。朝鮮半島の白頭山の巨大噴火のリスクを紹介している。

【日本列島の下では何がおきているのか 列島誕生から地震・火山噴火のメカニズム】 著 中島淳一 2018年 講談社

「プレートとは何か」から始まり、地球の構造、日本列島の生い立ち、日本列島周辺のプレートの配置、沈み込む太平洋プレート、フィリピン海プレートの歴史を分かりやすく説明。海洋プレートで起こる「含水化」に注目し、日本列島の地震・火山活動を解明している。

【地球科学の開拓者たち 幕末から東日本大地震まで】 著 諏訪兼位 2015年 岩波書店

地球科学の発展に日本の科学者が大きく貢献している。諏訪さんは、地球科学は、地質学と地球物理学、地球化学の三本柱から成り立っているとし、日本の地球科学がどのようにして始まり、発展してきたか紹介している。

.....

「歪められた地震予測 3.11の犠牲をもたらした構造」 著 島崎邦彦(2018 [世界10 no.913])

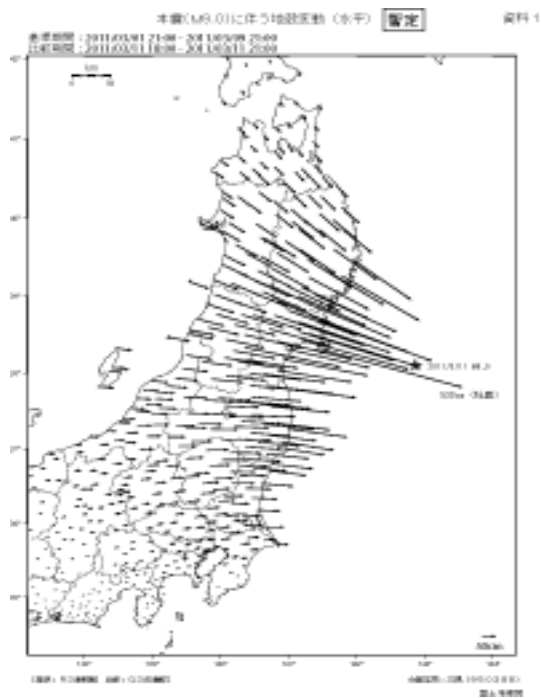
武藤類子「福島原発刑事裁判の意味 生きる尊厳を取り戻したい」 (2018 [世界10 no.913])

福島第一原発の刑事裁判でとんでも事実が明らかにされた。第一原発を襲った大津波は「予測不可能」であったので東電には瑕疵はないと東電は主張してきた。しかし東電幹部は、「巨大津波の予測」がある事を認識していた。そればかりか津波対策には巨費が必要となるので、この予測は「信頼性に乏しいもの」として対策を怠っていた。一方、「予測」を出した地震本部に対し、圧力が加えられ発表文書に「信頼性が乏しいもの」と印象づける表記を加えさせ、中央防災会議では「福島第一原発のある地域」である「東北南部地域」を「津波の発生」地域から外させていた。地震本部の委員であった島邦彦さんは、「当時なぜ、発表が遅らせられたり、信頼性が乏しいとの表記が突然加えられたり、東北南部地域が外されたのか気付かなかった。今思えば、原発のある地域を外させる意図があったのだ。「中央防災会議の決定に東北南部地域が「予測」どおり表記されていたら津波被害の犠牲者を減らすことができた。「無念でならない」との発言をしている。

事務局の官僚は、誰の顔を見て付度したのだろうか？ いや指示を受けていたのだろうか？ 事実経過と結果から、「科学的予測」を歪めた圧力は、「原子カムラ」によるものであったと推測できる。

「お役所の文書」を書きかえても、「自然の摂理」は容赦ない。真の敵は日本列島の地下に潜むナマズである。総力をあげてこれと戦わなければ、日本国民は壊滅的な被害を受ける。「目先の利益」と「己の保身」の為に、科学的知見を歪めた者、歪めている者、歪めようとしている

者を許してはならない。



↑ 2011年3月11日、本震（M9.0）に伴う地殻変動 国土地理院

8年前の東日本大震災では宮城県の沿岸部は、一気に5.3も東に移動し、1m近く沈降した。これによって日本列島は大きくゆがみ、余震は、10年間は続く。